

体操伝習所の医学関係図書に関する一考察

木村吉次*

A Study on Medical Books Found in the Library of Taiso-Denshujyo (The National Normal School of Gymnastics)

Kichiji KIMURA

Abstract

The purpose of this study was to investigate the characteristics of medical books found in the Library of Taiso-Denshujyo (the National Normal School of Gymnastics). Those books had been relocated to the library at the University of Tsukuba. Results of this study are as follows :

- 1) As the conception and the method of physical education should have been introduced into Japan from America and European countries at the beginning of the modernization of Japan, the school under the direction of Leland, G. A. tried to purchase the western books of medicine as well as those of physical education.
- 2) Taiso-Denshujyo changed the curriculum from the education which depended much on the western books to that using Japanese translation in 1871. This change urged the library of the school to get many books of translation.
- 3) The medical books of Japanese translation began to increase since 1878 and it met the demand of the changing education in the school.
- 4) The library collected two kinds of western medical books for the student. The one was an academic type of thick book and the other was a popular type of handy book.
- 5) As regards the western books of medicine used for the text book or reference one, the library had the books published in 1880. It was the early period of the school that the library bought many western medical books.
- 6) Among the western medical books, E. A. Parkes' A Manual of Practical Hygiene had an important meaning for the making of physical education. Because the book greatly influenced upon the G. A. Leland's lectures of physical education, particularly on the effect of exercise.

[1] 問題の設定

筆者は、先に体操伝習所に関する研究の一環として体操伝習所がモデルとしたアマースト大

学 Amherst College(アメリカ・マサチューセツ州)の体育・衛生学に関連して、そこで行われた健康論講義の内容を分析して、それを体操伝習所における G. A. リーランドの体育論講義

*教授

の内容と比較を行った。そこで明らかになったことは、アマーフト大学における E. ヒッチコック (Edward Hitchcock, Jr., 1828-1911) の健康論講義の内容と体操伝習所における G. A. リーランド (George A. Leland, 1850-1924) の体育論講義の内容には、全体として見た場合、とりたてて云うほどの類似性が見られなかったこと、しかし、体操伝習所の教科書・参考書類を視野に収めて体操伝習所の体育学教育における医学的知識の教育を判断したとき、体操伝習所の体育学教育には、生物学的および医学的基礎知識においてアマーフト大学の健康論講義の基盤となっていたものと通底するものが見いだされる、ということであった。

ところで、現在筑波大学中央図書館の「旧東京教育大学図書」中に残されている体操伝習所の図書を見ると、上述した第二点が一層明らかになる。本研究は、この体操伝習所の医学関係図書を取りあげて、体操伝習所の体育学教育における医学的基礎を考察しようとするものである。

〔2〕体操伝習所の教育と医学

体操伝習所の教育は、アメリカから G. A. リーランドを招聘して開始されたわけだが、最初の体操伝習所規則は、学科目に関して次のように規定していた¹⁾。

〔学科目〕

体操術 男子体操術、女子体操術、幼児体操術、美容術及び調声操法
 英学 読方作文英文学
 和漢学 讀講作文
 数学 算術代数学幾何学
 理学 解剖学生理学健全学等ノ如キ体育ニ緊要ナル関係アル諸学科及ビ物理学化学ノ大意
 図画 自在画法幾何図法透視画法
 但体操伝習所ハ体育学ヲ教授スルヲ以テ本旨トス故ニ英学以下ノ諸科ハ其大要ヲ学フニ止マル者トス

(下線一筆者)

体操伝習所は、年令 18 歳以上 20 歳以下の者が入学し、在学期間凡そ 2 年とされた。その教育は、上記の科目によって行われたのである。しかしながら、ここでの但書にあよりに、「体育学ヲ教授スルヲ以テ本旨トス……」として「体操術」、すなわち実技教授が中心で「英学」以下の、いわゆる「学科」の方は「其大要ヲ学フニ止マル者トス」と軽く扱われていたのである。医学的学科目はそうした学科の中の「理学」に分類されている。そして挙げられているのが「解剖学生理学健全学等」である。すなわち、解剖学、生理学、衛生学ということになる。

さらに、体操伝習所のその後の経過に即して云うならば、1981 年 9 月 5 日体操伝習所は方針を改めて、文部省直轄学校生徒および府県から派遣される伝習員等に体操術を授ける所とされた。入学者の年齢は 18 歳以上 35 歳以下の者で、修業期間も凡そ 6 ヶ月と短期の速修的になったこの改正にともなって、「教則」が改正された²⁾。府県から派遣された伝習員というのはすでに師範学校その他の教員であるため修身等の科目は置かれていないけれども、伝習が余暇に最も注意して学ばなければならないものとしていた。そして、学科に関して次のように規定していた。

学科 体操術ヲ本科トシ体育論及生理学ヲ以テ副科トス

このように極めて簡易なものに改められたのだ。これを 1884 (明治 17) 年の体操伝習所規則にみると、次頁の表のように規定されていて上記のものと同じである³⁾。(但し原文縦書き)

こうして、「教則」改正によって、それまでは「理学」として「解剖学生理学健全学等」の学科と「物理学化学ノ大意」を授けるとされていたものから、「体育論」の外では「生理学」のみが授けられる学科目として掲げられることになった。学科目全体としてもさることながら。医学関係科目だけについても、非常に簡略化されたわけである。このように、体操伝習所の教育は次第に発展して内容を充実させたというのとは反対に、後になってかえって内容は低下したことに注意しなければならない。

学課程表

学科	一週授業時数	伝習員		一週授業時数	文部省所轄東京各学校学生生徒	一週授業時数	別課伝習員
体操	九時間	軽運動 戸外運動 重運動 操櫓術		二時間以上	軽運動 戸外運動 重運動 操櫓術	五時間	軽運動 戸外運動 重運動
	三時間	歩兵操練	基本体操 生兵小隊	二時間以上	歩兵操練 基本体操 生兵小隊		
体育論	三時間	体性遺伝論ヨリ学校衛生論ニ至ル					
生理学	六時間	総論ニ始リ神経論ニ終ル					

- 一 戸外運動重運動及操櫓術ハ必修ノ科トセス適宜之ヲ授クルモノトス
- 一 文部省所轄東京各学校ノ体操科中東京女子師範学校生徒ニハ重運動操櫓術及歩兵操練科ヲ省キ又其ノ他ノ生徒ニモ時宜ニ由リ体操科又ハ其ノ一部ヲ科セサルコトアルヘシ

[3] 体操伝習所の図書購入

体操伝習所では、書籍器械を購入して教育条件の整備につとめていた。そのことは各年度の「体操伝習所年報」の記事にも見いだすことができる。それを拾い出すことによって体操伝習所における図書の整備状況を明らかにしよう。

体操伝習所の各年の図書の整備状況は、表1に見られる通りである。

1) 体操伝習所は、1878(明治11)年10月24日設置されてから、「……開設以来書器等ハ欧米諸国実施ノ物件ニ就キ斟酌折衷努メテ其適切ナルモノヲ取り或ハ之ヲ外国ヨリ購求シ或ハ之ヲ内国ニテ模造シ略ホ整備ニ至ルト雖猶逐次備置ス可キモノアリ……」(「第1年報」⁴⁾ 自明治11年10月至同12年8月一下線筆者) というよう

に、体育そのものが外来の概念であったため、その創設に際しては何としても欧米諸国に範をとり、書籍・器械の整備を図らなければならなかった。

この点は「第2年報」(自明治12年9月至同13年8月)⁵⁾ で「…是本所ニシテ欠ク可ラサルモノニシテ特ニ体操術書等ノ如キハ多ク外国ニ注文シテ之ヲ購求スルモノトス而シテ之ヲ前年ニ比スレハ員数モ増加シ粗ホ整備スルニ至レリ…」(下線筆者)と明らかにしていた。また、その体育の学問的基礎となるものが多く医学、すなわち西洋医学であったということ、こうしたことによって体操伝習所は最初の10ヶ月ほどで西洋書307冊を備えている。さらに、和漢書1,360冊の中には当然多くの翻訳書が入っていたわけである。

表1 体操伝習所蔵書数の推移

調査時	和漢書		西洋書		掛図	和漢書 増加分		西洋書 増加分		掛図 増加分
	部	冊	部	冊		部	冊	部	冊	
明12.8	164部	1,360冊	286部	307冊	1組6枚	部	冊	部	冊	枚
同13.8	208	1,676	330	398	1 6	44	316	44	91	0
同14.8	302	2,428	423	448	16	94	752	93	50	0
同15.8		3,055		482	13		627		34	7
同16.12		4,005		556	31		950		74	18
同17.12		4,106		582	21軸15枚		101		26	5
同18.12		4,945		582	36		839		0	0

(備考)「体操伝習所第1-7年報」(文部省第7-13年報付録)から作成

2)しかし、注意すべきは1880(明治13)年8月の段階ではほぼ整備できたというようなことを云っている点である。表1を見ると確かに各年度西洋書の増加分が減少していることが分る。これと対照的なのが1880年9月から1881(明治14)年8月までの第3年目から和漢書が急増していることである。これは「第3年報」⁶⁾で「…和漢書ノ部ニ於テ此ノ数多ノ増加ヲ為セル所以ノモノハ本学年ヨリ教規ヲ釐正シ専ラ解剖学生理学健全学ノ科程ヲ実修速達セシムルヲ要シ邦語ヲ以テ教授セシニ依リ実地参照等大ニ反訳書等ヲ需要スルニ由ルナリ…」(下線筆者)と説明されている。つまり、1880年10月伝習所は第2回生9人を入学させ、これを乙組生徒としたが、これに合わせて教規を改正したことによる。こうして、すでに教育内容の簡略化を行っていたのである。課程の「実習速達」のため日本語による教育を行うこととしたので、翻訳書が沢山要るようになったというわけである。ここで、特に解剖学・生理学・健全学が挙げられていることからすれば、当然医学書の翻訳書が増加したと考えられる。

3) G. A. リーランドによって日本の学校に適する体育の方法として「軽体操」が選定されると、1882年6月これの指導と普及のため体操伝習所から体操書の刊行を行った。それが「新撰体操書」と「新制体操法」である。1882年8月末現在の蔵書には体操伝習所刊の図書が多く加えられている。それを「第4年報」⁷⁾(自明治14年9月至同15年8月)は次のように述べている。前年度に比較して増加した分について「……図式7枚和漢書46冊ハ文部省ノ交付ニ係リ60冊ハ本所ノ印行西洋書3冊ハ他ノ贈付其他ハ総テ購求ニ係リ……」(下線筆者)と述べていた。

4)また、1883年12月末の蔵書数が前年度に較べて和漢書で950冊と顕著な増加になっているのは学年末が9月から翌年8月までとなっていたのが、暦年に改められたのにもなって、このときは1882年9月から1883年12月までの1年4ヶ月の期間だったからである。これは「第5年報」⁸⁾でことわっている点である。

5)1884年1月から同年12月のところで、和漢書の増加が僅かに101冊と少ないのは、この年図書の整理の仕方を変更したことが関係している。「第6年報」⁹⁾は次のように記述している。すなわち、「…其和漢書並ニ西洋書ノ減少セル所以ハ例ヘハ小学普通畫学本ノ如キ纔ニ数葉ヲ以テ冊ヲ為スモノハ其調理ト保存トノ便ニ依リ五十冊若クハ六十冊ヲ一括シテ之ヲ一部ノ大冊ニ變綴シ其他翻訳書類ノ如キ逐次ノ刊行ニ係ルモノハ其全刊ヲ得テ後チ其数部ヲ集メ之ヲ一部ニ補綴スル等ニ由ルナリ是故ニ前年末ノ調査ニ於テ譬ヘハ百冊ノ員数ヲ示セルモノ今ハ減シテ纔ニ十冊ノ現数トナルモ其差ハ唯タ帳簿上ノ変更ニシテ毫モ減少ヲ為サ、ルナリ但二三ノ書冊ニシテ点断裂等甚シク到底实用ニ適セサルモノ、如キハ之ヲ減少ノ部ニ組替セリ…」(下線筆者)というのである。このため、ここでの増加は従来の傾向と単純に比較できない。

6)最後の1885年末のところでは、和漢書893冊とかなりな数の増加となっている。このころまでには体操伝習所関係者や卒業生などによる体育書・遊戯書などの出版も見られるようになっていたので、和漢書の増加が著しかったものと思われる。しかしながら、ここに至って西洋書の増加が零だったことは注目されるべきところである。これは、体操伝習所が大きく性格を変えていることを暗示するものであるが、事実この年12月体操伝習所は東京師範学校付属体操伝習所と改められた。そして、さらに翌年4月29日には付属体操伝習所が廃止となり、高等師範学校(4月9日東京師範学校が昇格)に体操専修科が置かれるという経過をたどったのである。

7)以上のように体操伝習所の蔵書の推移を見ると、その蔵書構成が明確でないのが、あまり確実なことは云えないが、当初かなり意欲的に和漢書・西洋書の購入を行ったと思われる。何分にも体育は欧米の概念であり、文化であったから、そして、その購入にはG. A. リーランドが重要な役割を果たしたことが考えられる。その中には、当然医学書・体育書・遊戯書等が含まれていたと見られる。とくに、最初は翻訳

書も少なかったり、あるいはほとんどなかったりといった状態であったわけである。しかし、翻訳書の増加と教則の簡易化が行われると、和漢書の急増が見られ、西洋書の整備は次第におろそかになってきたことが明らかである。それは、当初の移入から進んだものともいえるが、逆に言うところここで一定の枠付けが行われたのだとも見られよう。

【洋書】

(教科書関係)

解剖生理健全学 「ヒッチコック」氏著

同書 「オッター」氏著

生理書 「ハックスレー」氏著

生理健全書 「ダルトン」氏著

(口授書取用書関係)

ダルトン氏著 大生理学

バック氏著 大健全学

パルク氏著 大健全学

グレイ氏著 大解剖学

ハックスレー氏・

ユーマン氏著 大生理健全学

[4] 医学関係図書について

体操伝習所の教科書・参考書であるとして医学書が示されたことがあった(1882年7月1日文部省地方学務局長辻新次名で東京府知事宛の照会文)。筆者はこれについて既にふれている¹⁰⁾。これには和漢書(以下では特別な場合以外は和書とのみ記す)と西洋書(以下では洋書と記す)の両方が含まれていた。まず、洋書の方を見ると下欄左側のようなものであった。

Hitchcock, E & Hitchcock, E., Jr. ; Elementary Anatomy and Physiology, N. Y. & Chic 1878] ★

(?) Cutter, C ; A Treatise on Anatomy, Physiology and Hygiene, Phil. 1852] ★/2 不
Huxley, Th. H. ; Lessons in Elementary Physiology, (?) 10. ed., 1876 or 11. ed., Lond. 1878

師・不

Dalton, J. C. ; A Treatise on Physiology and Hygiene, N. Y., 1880. 師・不

Dalton, J. C. ; A Treatise on Human Physiology, 6 ed., Phil., 1875. 師・不

Buck, A. H. ; A Treatise on Hygiene and Public Health, 2 vols, N. Y., 1879.★

Parkes, E. A. ; A Manual of Practical Hygiene, 4 ed., Lond., 1873. 師・不

Gray, H. ; Anatomy-Descriptive and Surgical, 8 ed., Phil., 1878.★

Huxley, Th. H. & Youmans, W. J. ; The Elements of Physiology and Hygiene, N. Y., 1879.★

1) これらの教科書・参考書とされたものはもちろん体操伝習所の蔵書になっていたものである。上記文書では邦語の書名しか記されていないので、原書名を調査してみると右欄に記し

たものが明らかになる。一部断定しがたいものもあり、一応推定を行ったものも含まれる。たとえば、解剖生理健全学「オッター」氏著というのがあるが、このオッターという名前の医学

者の著書は、アメリカ合衆国議会図書館の図書目録にも発見できないものであって、多分にカッターのカをオと書き写すときに誤ったのではないかと考えられる。そうして見ると、Cutter, C. という人とその著書が見いだされる。

ともあれ、この確認は体操伝習所以来の蔵書を引き継いできた筑波大学中央図書館の旧東京教育大学図書を調査(1995年7月)することによって行った。邦語名の書の原著(洋書)と原著者名を明らかにすることを重点にしたので、体操伝習所蔵書中の和書の確認が完全には出来ていないことを断っておきたい。

上記の教科書・口授書取用書一覧の右欄に記載した書名に★印を付けたものは「体操伝習所図書印」があるものである。これによって、体操伝習所蔵書だったことが明らかになる。

また、不と記したのは「東京文科大学図書館図書目録」(1934-1936)に収録されているが、調査時に筑波大学中央図書館所蔵旧東京教育大学蔵書中に確認できなかった「不明」のものである。しかし、この「不明」の図書の中にも体操伝習所蔵書があった可能性がかなりあることを考慮に入れておく必要がある。

さらに、師と記したものは東京師範学校(後に高等師範学校となる)蔵書印のあるものである。これは、当時体操伝習所だけでなく東京師範学校でも同じように相当数の医学書を購入していること、それらには体操伝習所の蔵書と同じものや類書が沢山含まれていることを示すものである。したがって、先に「不明」について述べたが、これには東京師範学校分も入っていると考えなければならない。なお、師・不というように記したものは、東京師範学校蔵書が1冊ある他にさらに1冊図書目録にあって書庫にないものがあるということで、この不明本が体操伝習所蔵書であった可能性は非常に高いと考えられる。

2)ここに掲げられている著書の著者たちの名は一部、既に1872(明治)5年東京大学の前身であった大学南校が第一番中学と称した頃の学科目生理学の科目名に付されていた¹¹⁾。「カッター」「ダルトン」などがそれである。また、

1875(明治8)年大学南校が東京開成学校となつてからの予科での教科書目として示されたもののうち、「生理学」では「ヒッチコク」と「ハチソン」(J. C. Hutchinson: A Treatise on Physiology and Hygiene, N. Y. 1878.と思われる)が挙げられていた¹²⁾。さらには、札幌農学校の場合を見ても、「生理学」の科目があり、蔵書にも「ヒチツコック」(ヒッチコックの誤り?)「解剖及生理書」,「カッター」の「人心(身)究理」,「ホキスレー」(ハクスレーと思われる)の「性理及健全」などの書が入っていた¹³⁾。そして、これより以前にも1873(明治6)年東京師範学校の教則中「余科」(予科)初等第2級の教科の一つに「一 生理書カッター」が掲げられていた¹⁴⁾。こうしてみると、これらの著者は全く初めて聞く名前ではなくて、一部ではある程度知られていた学者たちだったということになる。すなわち、リーランドの構想にしたがって整備したと思われる体操伝習所の洋書の医学書は、日本の創設期の高等教育機関の他のところでも当然のように採用されていたものであったことを考えるとき、それらは19世紀半ばの欧米、とりわけアメリカで、ある程度標準的と考えられていたものであったことがわかる。この点では、先にE. Hitchcockとその教え子G. A. Lelandが共有した世界が当時整備を急いでいた日本の教育制度にまで及んできたのだと考えられるもので、決して体操伝習所だけに固有に見いだされるものではなかったのである。

3)次に気付かれるのは、教科書と口授書取用書の違いである。まず、教科書とされたものは、書物の体裁からいっても、Hitchcock, E. & Hitchcock, E., Jr.: Elementary Anatomy and Physiology, 1860.(体操伝習所蔵書)を例にとるならば、19.2 cm×11.6 cm, 本文とindex等で443ページの本というようにハンディなものであった点が共通している。また、内容的にも解剖学と生理学、あるいは生理学と衛生学を一緒にしたものがほとんどで、しかもタイトルに「初歩の」elementary という形容詞がついたりしていた。

これに対して、口授書取用書の方は邦語訳の

タイトルに「大生理学」「大健全学」「大解剖学」と「大」を冠していたのは伊達ではなく、実際に大著であった。例えば, Buck, E. H. : A Treatise on Hygiene and Public Health, 1879. は, サイズが23.1 cm×14.4 cm と大きくなっている上に, 2巻本であり, 第1巻だけでも787ページもある大冊であった。他の書も同様の大冊であって, それぞれ専門書にふさわしい立派な書物である。すなわち, Gray, H. : Anatomy, descriptive and surgical, Phil, 1878. は, index

等も含めて982ページ, Dalton, J. C. : A Treatise on Human Physiology, Phil, 1875. は同じく825ページ, Parkes, E. A. : A Manual of Practical Hygiene, London, 1873. も672ページあった。

3) 上記の口授書取用書中でも, G. A. リーランドが「李蘭士氏講義体育論」の中でもっとも多く引用していたパークス (Parkes, E. A.) 衛生学書の項目を示しておこう。

BOOK I

Chapter I	水
Chapter II	空気
Chapter III	換気
Chapter IV	空気の検査
Chapter V	食物
Chapter VI	食物の質, 選択, 料理
Chapter VII	飲物と調味料
Chapter VIII	土壌
Chapter IX	居住地
Chapter X	老廃物の除去
Chapter XI	住居の暖房
Chapter XII	運動
Chapter XIII	衣服
Chapter XIX	天候

Chapter XV	気象学
Chapter XVI	個人衛生管理
Chapter XVII	死者の処理
Chapter XVIII	通常の子の予防
Chapter XIV	消毒
Chapter XX	統計

BOOK II

軍人の勤務

Chapter I	新兵
Chapter II	軍人の置かれた条件
Chapter III	軍隊勤務の結果
Chapter IV	外地勤務
Chapter V	乗船勤務
Chapter VI	戦争

上記のように第2部で軍隊衛生を扱っていることがこの書の一つの特徴となっている。著者パークスがイギリス人であり, 大英帝国の軍隊はジブラルタルからインド, 中国にまで展開していた。健康はまさに気候, 風土との関係で考慮されるべきものであった。このことは, おそらくリーランドが日本の学生生徒ので健康を保持増進するための体育を論じた体育論を構想したとき強く意識させられたところだったろうと思われる。ただし, 文中で直接名前を挙げているのは, フォスゲル, ベルツ, ブラックー等である。

パークスの衛生学書の第二の特徴として注目されるのは, 適度な運動を健康に必須なものとして一章を当てていることである。「第12章

運動」は, 第1節 運動の効果, 第2節 運動の量, 第3節 トレーニングの3節から成っていた。リーランドは, 体育論講義¹⁵⁾において「体操」を論じたところでも「Parkes 氏健全学の大書を著し言へる事あり。完全の健康とは諸器関皆相当の運動を受くる事を含むものなり。…¹⁶⁾」と述べていたが, これはまさにパークスの書の第12章運動の最初の文言 ‘A perfect state of health implies that every organ has its due share of exercise.’ に他ならなかった¹⁷⁾。そして, リーランドは「体操の身体各部に生ずる効果」を明らかにするために, 第1筋肉系, 第2血液循環系, 第3呼吸器, 第4栄養機, 第5皮膚, 第6神経系統の各器官系について体操の及ぼす効果を論じていた。リーランドは皮膚の項

を除いてあとはどの器官に関しても必ず「パークス氏曰……」というふうにパークスの論述を引用して自分の体育論を展開していた。ここだけで11回パークスに依りながら述べていた¹⁸⁾。こうして、リーランドの体育論講義の体操（より一般的に云って運動）の効果を論じたところは、結局上述したパークスの衛生学書に最も多く依拠していたことが明らかになるのである。ただし、運動の量の箇所はほんの僅かしかリーランドの講義筆記には記載されていないし、トレーニング概念は筆記では全くとりあげられていなかった。これはリーランド自身によるものなのか、あるいは筆記者・翻訳者が簡略化してしまったのかは現在では明らかにすることが困難である。

4) さて、洋書に関して最後に上記教科書・口授書取用書に掲げられなかったが、現在筑波大学中央図書館に所蔵されていて体操伝習所図書印があるものを以下に示そう。

Beecher, C. E. : Physiology and Calisthenics, N. Y., 1873.

Bulkley, L. D. : The Skin in Health and Disease, Phil., 1880.

Burnett, C. H. : Hearing and How to keep it, Phil., 1880.

Cohen, J. S. : The Throat and the Voice, Phil., 1880.

Cutter, C. : First Book on Anatomy, Physiology, and Hygiene for Grammar Schools and Families, Phil., 1854.

Flint, A. : Physiology of Man, 5Vols., N. Y., 1869-1875.

Hall, W. W. : Health by Good Living, N.

【和書】

体操伝習所の教科書・参考書等で和書の医学書は、次のようなものが示されていた。

(教科書関係)

華氏解剖摘要	村上典表記
達爾頓氏生理書	物部誠一郎訳
生理提要	小林義直訳

Y., 1871.

Heath, Ch. (ed. by Keen, W. W.) : Practical Anatomy; A Manual of Dissections, Phil., 1870

Lawson, H. : A Manual of Popular Physiology, N. Y., 1873.

Lincoln, D. F. : School and Industrial Hygiene, Phil., 1880.

Osgood, H. : Winter and its Dangers, Phil., 1881.

Marshall, J. : A Description of the Human Body, Vol. I, Text 3. ed., Lond., 1875.

Packard, J. H. : Sea-Air and Sea-Bathing, Phil., 1880.

Wilson, G. (ed. by Richardson, J. G.) : Health and Healthy Homes, Phil., 1880.

Wood, H. C. : Brain Work and Overwork, Phil., 1880.

なお、この他にも目録にあって「不明」となっているものの中に体操伝習所図書だったもののがかなりあったものと推測される。ともあれ、上に掲げた洋書の医学書を見ると、そこにはフリント (Flint, A.) の5巻からなる生理学書のように学問的体系的なものとウィルソン (Wilson, G.) の健康書のように通俗的実用的なものとの両方のものが含まれていたことがわかる。また、出版年をみると、1880年の出版となっているものが多い。1878年が体操伝習所設置の年であったことを考えると、設置時ないしは設置直後の購入だけでなく、前掲の表からも分かるように、1880, 1881年のところの洋書の増加が91冊, 50冊と多かったときの購入に係るものであったろうと思われる。

★ 9巻 (和) 米ハルツホールン著明治10

★ (和) 米タルト著 (ダルトン) 明治14

★ 12巻 (和) 米ホクスレー著 (ハクスレー) 明治10

健全学 杉田玄端訳

(参考書)

解剖生理諸図式

解剖攬要

解剖訓蒙

医科全書・解剖篇生理篇

普俠氏組織学

1) 上記の右欄内の記述は、筆者の調査結果である。ここでは、「解剖攬要」のみが著書と思われるもので、他はすべて翻訳書であったことに注目しなければならない。(和)と記したのは和装本の意である。幕末から明治初期は翻訳書もまだ和装本だったのである。版を重ねたとき洋装本となったものもある。

これらの教科書・参考書以外でも筑波大学中央図書館には体操伝習所図書印を有する医学関係書が沢山見出される。それらを以下に示すことにしよう。

華氏解剖摘要図	米 ハルツホルン著 村上典表訳 明治 11
虞列伊氏解剖訓蒙図	虞列伊氏著 松村矩明訳 明治 5
生理養生論	米 カットル著 小林義直訳 明治 14
喝氏初学人身究理	2 卷(和) 米 カットル著 伊藤正信訳 明治 13
越氏生理各論	前編 4 卷 後編 7 卷(和) 蘭 エルベレンス講述 大久保常成筆録 明治 10
初学人身究理後編	3 卷(和) 松山棟菴編 明治 13
改正再版人身生理学	3 卷(和) 松山誠二編 明治 15

★ 6 卷(和) 英 ロバート・ゼイムス・メン著 コブス補訳 慶応 3

「医学七科問答」の内・律度羅著(リュードロー) 田口和美訳 [? 著] ★ (和) 13 卷 明治 10

米 レディ氏著・今村東訳(松村矩明の旧訳参照)

★

解剖篇：繆爾列兒・忽布満講述，山崎玄脩

生理篇：チーゲル氏講述，永坂周二編 ★★ 明治 12

フライ氏原著 三浦省軒・長谷川順治郎訳 9 明治 12

生理全書 2 卷 藤堂軾三訳 明治 13, 14

生理提要 附 3 卷(和) 米 ダルトン著 生田安宅訳 明治 12

病理総論 三宅 秀 明治 13 序

2) 以上が確認できた体操伝習所図書印のあるものである。これも洋書の場合と同じく「不明」本の一部がやはり体操伝習所所蔵本だった可能性があるし、また先の体操伝習所年報の数字や記述から判断して東京文理科大学図書目録作成以前に紛失したものも相当あったのではないかと思われる。

3) 体操伝習所では、明治 13 年 9 月から同 14 年 8 月の間に和漢書が急増したことは先に見た通りだが、上に掲げた和書の発行年を見ても明治 10 年代に入って次第に翻訳出版されるのが多くなっていることが分かる。それは体操伝習所の簡易・速修の必要にまさに応ずる状況が生まれていたのである。このことが実際に購入され、所蔵された医学関係和書の面からもうかがえる。

4) この和書の原著者の名前をみると、「ハルツホルン」「ハクスレー」「カットル」「ダルトン」など、洋書で教科書・参考書に掲げられた書の著者たちである場合が多く見いだせる。つまり、洋書による教育から和書を中心とする教育に切り替えたわけだが、内容的には従前と同様にし

たいという考えであったことを表すものと受け取れる。

[5] 結 語

本研究の結果以下の点が明らかになった。

1) 体操伝習所は欧米の体育概念の移入、実際に日本の学校に適した体育方法の選定を行い、それらを身につけた体育教員の養成を課題としていたが、このことは必然的に欧米の書籍、すなわち体育書、医学書を多数必要とした。なぜなら、体育の概念自体が欧米のものであり、それによって形成されてきた体育方法（体操など）だったからである。

2) しかし、体操伝習所の教育が簡易化・速修的なものに改められたのにもなって、明治13-14年頃から図書整備は洋書購入を少なくし、和書購入に重点を置くようになった。そして、これに応ずるように医学書の翻訳書なども次第に多く出版されてきていた。

3) 教科書・参考書等に数えられた書も含めて体操伝習所蔵書には、「ヒッチコック」「カトル」「ハクスレー」「ダルトン」などの著書が含まれている。これらの著者たちは、ただ単に体操伝習所の教育においてに関係があっただけでなく、明治初期創成期にあった日本の高等教育機関で、中でも「生理学」などの科目では、これらの著者の著書が教科書等に挙げられていた。つまり、日本の高等教育機関に広く受け入れられていた名前である。

4) 和書の医学書を中心とした教育に切り替えても、和書の原著者の多くが洋書で教科書・参考書とされた著書の著者だったことから、内容的に従前と同様のものを考えていたと見られる。

(本研究は平成7年度中京大学特定研究助成費による研究成果の一部である)

注および文献

1) 「体操伝習所年報」自明治11年10月至

- 明治12年8月、文部省第7年報付録、388。
 2) 「体操伝習所年報」自明治14年9月至明治15年8月、文部省第10年報付録、887-890。
 3) 「体操伝習所規則」明治17年2月改正、2。
 4) 「体操伝習所年報」自明治11年10月至明治12年8月、前掲書、389-390。
 5) 「体操伝習所年報」自明治12年9月至同13年8月、文部省第8年報付録、488。
 6) 「体操伝習所第3年報」自明治13年9月至同14年8月、文部省第9年報付録、792。
 7) 「体操伝習所年報」自明治14年9月至同15年8月、文部省第10年報付録、891。
 8) 「体操伝習所第5年報」自明治15年9月至同16年12月、文部省第11年報付録、919。
 9) 「体操伝習所第6年報」自明治17年1月至同17年12月、文部省第12年報付録、585。
 10) 木村吉次(1995)「アマーフト大学の保健講義資料に関する一考察」中京大学体育学論叢、Vol. 37, No. 1, 15, 1-17。
 11) 「当校生徒教科順序取調ノ件」(1872)文部省往復、東京大学史史料室所蔵。
 12) 「本校校則入用ノ件」(1885)同前。
 13) 「明治11年英籍目録」北大百年史札幌農学校史料(一)(1981)、ぎょうせい、388-425。なお、1878年1月16日札幌農学校教師ウィリアム・ホキラーは「生理学比較解剖学英文学教師兼開拓使病院顧問の候補として第1「イドワード・ダブリュ・エムソン」、第2「ジョン・クラレンス・カター」の順で推薦していた。実際の契約書(「条約書」と称していた)では、名前が「エドワード・カラレンス・コッター」となっていた。(北大百年史、前掲、329、364-366;同、通説(1982)、58-59参照)。然し、札幌農学校の外国人教師の一覧では「カッター Jhon Clarence Cutter 米 1878.9.7~87.1.20」とある。ユネスコ東アジア文化研究センター編(1975)「資料 御雇外国人」(小学館、

246)は、これを同一人物として扱っている。Cutter, J. C. も 'Lessons in hygiene : an elementary text-book on the maintenance of health, Phil.' [刊年不詳], 'Beginner's anatomy, physiology, and hygiene, including scientific instruction on the effects of stimulants and narcotics on the growing body, by John C. Cutter, Phil. J. B. Lippincott Co., 1887' などの著書があるが、1851年生まれであるから札幌農学校教師となったのは弱冠27歳のときということになる。Cutter, C. [Calvin] は、1807-1872の生存であり、その著書(東京文理科大学図書目録にあるもの)は 'A Treatise on Anatomy, Physiology and Hygiene. Phil. 1852', 'First Book on Anatomy, Physiology and Hygiene. Phil. [刊年不詳]', 'Intermediate Anatomy, Physiology and Hygiene. (Cutter's Series of Physiology), Phil., 1887.', 'New Analytic Anatomy, Physiology and Hygiene. Phil.,

1870.', 'Second Book on Analytic Anatomy, Physiology and Hygiene: Human and Comparative. Phil., 1871.' などがあつた。これらの刊年は、1852-1887である。以上のことを勘案するとき、当時「カッター」氏として教科書等に用いられたのは、Cutter, C. の著書であつたと見られる。東京文理科大学図書目録にはCutter, J. C. の著書は見いだせない。もっとも、この二人は親子ないしは親戚関係にあつたかもしれない。

- 14) 東京高等師範学校 (1911) 東京高等師範学校沿革略史, 10.
- 15) 「李蘭士氏講義体育論」: 今村嘉雄(1968) 学校体育の父 リーランド博士, 不昧堂, 129.
- 16) 同, 142-158.
- 17) Parkes, E. A. (1873) : A Manual of Practical Hygiene, 4th ed., J. & A. Churchill. Lond., 379.
- 18) 今村, 142-158.